

## コラム 5

# 東部紛争被災者ベジャ系部族ムサさんの体験

宍戸健一



2011年6月5日午後、私は、一路カッサラ州の北デルタ郡ワガールに向かい、まずコミュニティ・リーダー（小学校校長）のムサさんに会った。彼は、東部地域にいちばん古くから居住している最大の部族ベジャ族の一部のハデンドワ族だ。

1956年のスーダン独立時、ベジャ族の会議で、スーダン政府に参加することが決定されたが、実際には多くのベジャ族には、社会サービスが行きわたらなかった。これがベジャ族の村でアラビア語があまり通じない背景ともなっている。

その後、1980年代のヌメイリ政権になり、東部地域が3州に分かれ、カッサラ州政府が樹立されたが、政権を支持するグループ（注：部族でない）にのみ公共事業や支援が行われたため、この地域の住民にも徐々に格差が生じはじめた。しかし、当時のグループ毎の紛争は、部族リーダーが仲裁すれば収拾していた。

1990年代に入り、エリトリア独立直前の頃、ベジャ族の一部、特に貧しい若者はエチオピア（現エリトリア領）の反政府勢力キャンプで6カ月の軍事訓練を受け、武装して戻って来た。彼らは、エリトリアの影響か、スーダン政府に対する不満により、政府施設の襲撃破壊や略奪を行うようになった。これが激しくなってきたのが、1994年頃のことであり、その後、2003～05年に激化した。

ここワガールの街も、2003年には反政府の武装勢力の攻撃を受けたが、武装勢力の中に、

---

自分の教え子がいたため、教師を長年やって来たムサさんの元には、事前に襲撃を予告する「脅迫状」が届いたという。



でも、自分は、同じ部族同士だから大丈夫と思いコミュニティに留まった結果、自分に危害は加えられなかったが、学校の施設は破壊されてしまった。

その後、2006年に東部和平協定が結ばれてからは、以前のような争いもほとんどなくなり、政府やNGOによる事業が増えてきて、少しずつだがよくなってきた。

以上